

「普通に働く・研究する」

名古屋大学 大河内 美奈

国際学会の懇親会でひょんなことから女性の先生方が集まり、自国の職場の男女比や自分が仕事をしている経緯について話題になることがある。大変な状況乗り越えて懸命に研究を進めてきたという方や、恵まれた環境で活躍している方、このような話題はあまりお話したくないと言ってその場を去る方、様々な方を取り巻く研究環境や家庭環境を垣間みることができる。日本は、男性に比べてまだまだ女性研究者や技術者が少ない状況にあるが、価値観が多様化する現代において、女性・男性という壁がなくなる時代はもうすぐそこにある。

私は現在、名古屋大学工学研究科に勤めているが、同じ講義を担当した女性教員と打ち合わせをした後、「今度、一緒にご飯でもいかがですか」とお誘いしたところ、「いいですね。いろんな先生方と一緒にいかがですか」と結局、40人弱の理系部局の女性職員と昼食会をひらくこととなった。色々な部局から集まるとこんなにたくさんの方がいらしたのだと、楽しく昼食をいただいた。この昼食会がきっかけとなり、たまに学内でこのとき知り合った先生に会うと、日常生活で何となく思うことなど、和やかにお話しできるようになった。

名古屋大学は男女共同参画室を設置し女性研究者が活躍できる環境を実現する取り組みを進めており、私も昨年より参画室の一員となった。微力ながら精一杯アイデアを出し合い、活動を進めている。男女共同参画室の具体的な取り組みとしては、仕事と家庭の両立支援策の検討・実施、女性研究者支援・育成プログラムの展開、大学内保育所の運営強化、女性教員比率の検討、女子学生支援・進学推進策などの展開である。私が実際に携わっているのは育児支援ワーキンググループであるが、女性研究者を取り巻く実態を知ると多くの方が家庭生活との両立において綱渡りともいえる状況を抱えている。学内への自家用車の入構許可の取り決めについて等、直接関係ないようにみえることも子供の送迎との兼ね合いから、その家庭においては大きな問題に発展してしまう。また病気になった場合の対応については、なおさらである。現実には、色々な問題があることを知った。

「女性研究者」という存在は、かつては男性と同じであることが求められ(女性であることを放棄し)、現在では女性としての権利を求めつつ、業務内容も待遇も男性と同等のものを求める厄介な存在だと依然としてとらえられることが多いのではないのだろうか。女性研究者が自主的に世の中に貢献するためには、解決しなければならない問題が多くあり、私達が手を出せない問題も多い。でも、ほんの少しの手助けを積み重ねることが大きな力になる。「女性研究者」の現状の正しい理解と目指す姿を浸透させることが、私達に求められていると感じる。

高校のときにヒトゲノム計画についての可否が問われ、生物というものを本当に理解しようとする、すごい取り組みが進められていることを知った。なんとなく、大学で生物関連の学問というものに触れたいと思ってから大分、時が過ぎた。実験そして研究を進めていくときのわくわく感、緊張感、色々な方との出会い、そんなものがきっかけで研究を続けてきたように感じる。この「小さなきっかけ」を押し流してしまうたくさんの問題点が、「女性研究者」の育成にブレーキをかけてしまう。もっと、「普通に研究する」ことができるように私達も努力を続けるが、これを可能とする施策の検討と、皆さんからの温かい応援や励ましをいただけると幸いである。



研究室の飲み会にて(左側中央が執筆者)

大河内 美奈 (おおこうち みな) 氏

<最終学歴>

東京農工大学大学院 工学研究科
物質生物工学専攻 博士課程修了
博士 (工学) 取得

<現 職>

名古屋大学大学院
工学研究科 准教授